

〔閑田耕筆^四〕餅をかちんといふにつきて、或は能因法師伊豫の三島にて、祈雨の歌をよみて、驗ありしよろこびに、餅をつきてもてなしけるよりおこれるとして、則歌賃の字を充、又いつの比とかや、朝廷御衰微の比川端道喜なるもの、日毎に餅を獻す、豆^豆のもちを獻するに、小それが褐色の服を著たりしより、女房達けふはかちんはいかになどいひならはせしより、終に餅の異名となれりともいふ皆信じがたきを、藤堂樂庵^{カチ}搗飯^{ならん}といはれしは理に覺ゆ、搗栗といふも、栗を搗たる也。

〔雨窓閑話〕小野木家妻女并かちんの事

某の人のいはく、○中總じて、昔は歌の會に餅を出だして、勝劣の賞にあたへしによりて、歌賃といふとも、又内裏微々なりし頃、褐色の袴著たる男、小豆餅を箱に入れて、築地の邊を賣りありきけるに、女房達是を呼びて、褐々と言ひしより、餅をかちんといふともいへり。

〔物類稱呼^四衣食^一〕餅^{もち}。和名^{もちひ}。關西にて、あと云、江戸にては小兒に對して、あもといふ、○略か^二み餅、諸國の通稱也。圓なる形によるの名なりとかや、東國にて、そなえと呼、又ふくでん。共云、越後及信濃にて、ふくでと云、搔餅^{さわぎもち}。鏡餅^{かがみもち}に刃^{のこ}鋸^{のこ}を以て、を嫌て、手を以てかく故にかきつけづり餅^{さわぎもち}と云。同國にて、かき餅を氷らせて、名づけてし、み餅^{みもち}といふ。ある人のもとにて、搔餅を炙りて出せり、餘りにかたかりければ、老の歯には得及ばじといふ。あるじのいふ、さらば搔餅によする述懐と云題にて、狂歌よめといひ侍れば、

老の身の今さら恥をかき餅のむかふ鏡の昔戀しき

吾山

〔徒然草^下〕最明寺入道時頼北條鶴が岡の社參の次に、足利左馬入道の許へ、先使をつかはして立いられたりけるにあるじまふけられたりける様、一獻にうちあはび、二獻にゑび、三獻にかいもぢるにてやみぬ。^{○下}略